

物語を語り継ぐ

2011年1月8日、*Honolulu Star-Advertiser* 紙のホームページで、ある非営利団体が1月14日から17日にかけて開催する第18回「ホオクイカヒ」の紹介記事が載った。この行事の規模は分からない。同団体のホームページの写真を見たところ、一非営利団体の定例行事といった趣である。「ホオクイカヒ (ho'oku'ikahi)」とはハワイ語で「和解」の意味。18年前にキリスト合同教会 (the United Church of Christ : UCC) がハワイ人に対して行った公式謝罪を記念するのが、この行事の目的である。

私達は、あなた方とあなた方の祖先、すなわち先住ハワイ人に対して私達が犯した罪を認めます。私達の宗派が、不当にも西洋の流儀とキリストの流儀を同一視し、土着のハワイの成熟した社会を過小評価したがために、1893年のハワイ王朝の不法な転覆に歴史的に加担したことについて、私達は公式に謝罪します。

1993年1月17日、100年前にハワイ王朝が転覆されたその日に、米国本土から訪れたUCC管長ポール・シェリー牧師がハワイ人に対して述べた言葉である。この公式謝罪は、ハワイ王朝転覆100周年記念行事「オニパア」のクライマックスとなる催しであった。彼はカウマカピリ教会の敷地に張られたテントの中で約500人の聴衆に謝罪の言葉を述べると、すぐさまイオラニ宮殿に向かい、庭園の戴冠式スタンドで改めて公式謝罪を行った。また、各島から持ち寄った石で拵えられた祭壇に謝罪文書を供物として捧げたのだった。

この公式謝罪は、王朝転覆について会衆派教会にその責任の一端があることを認めた点で画期的なものであった。しかし、謝罪される側のハワイ人の中では、それは複雑な思いを持って受け止められた。ハワイ伝道協会 (HEA) の後身組織であるハワイ部会 (the Hawaii Conference of the UCC) 内では、白人教会だけでなくハワイ人教会においても謝罪表明に対する反対意見が少なくなかった。一つには、総大会がハワイ部会の頭越しに公式謝罪の決議を行ったこともある。また、この謝罪によってハワイにおけるキリスト教伝道の歴史の全てが否定されてしまうのではと危惧する者もいた。だが、この謝罪が、ハワイ人キリスト教徒にとって、キリスト教徒である自分がハワイ人である自分に謝罪するという奇妙な状況を呈していたことも見逃してはならない。

UCCの謝罪に続き、同年11月にはクリントン大統領が合衆国の先住ハワイ人に対する「謝罪決議」に調印した。だが、教会や政府が公式に謝罪した後の18年間でいったい何が変わったのか？ ハワイ人の暮らし向きは良くなったのか？ そのような問いに対して苛立ちをもって答えるしかないのなら、「ホオクイカヒ」行事のように公式謝罪の意味を問い直し続けることが重要になる。ハワイ語で「歴史」は「モオレロ (mo'olelo)」。系譜や継承を意味する「モオ (mo'o)」と言葉や話を意味する「オーレロ ('olelo)」が合わさって出来た言葉である。歴史とは単に過去に起こった出来事のことではない。「モオレロ」の語源が示すように、それは物語を語り継ぐことに他ならない。過去の出来事を語り継ぎ、現在においてその出来事を反芻し、未来に向けて新たな意味を付与することの大切さを再確認する必要がある。

会衆派教会と王朝転覆

19世紀前半は会衆派教会と王族は互いに持ちつ持たれつの友好的な関係を築いていた。だが、同世紀後半に入るとその関係は徐々に崩れていく。1854年に即位した反米派のカメハメハ4世が英国聖公会の支援に回ったことはHEAの活動に打撃を与え、1863年に即位したカメハメハ5世はカフナなどに代表される伝統文化の復興に力を入れたと言われる。1874年に即位したカラーカウアはフラを大々的に復活させ、ハワイの「古代科学」の復興を目的とした秘密結社を設立したりした。王政レベルでのキリスト教化に逆行する動きは、ハワイ人による文化的主権を奪回する動きとも言える。だが、HEAはこのような王室と次第に距離を取るようになり、19世紀末に向けて両者の関係は冷えきったものになっていった。

19世紀前半にハワイのキリスト教化と西洋化を牽引した会衆派教会は、同世紀後半に入ると経済の分野においても少なからぬ影響を持ち始める。例えば、サトウキビ産業を支配した「ビッグ・ファイブ」のうちの二つまでが宣教師に縁のある企業であった。教会が直接的にハワイ経済に介入することはなかったが、経済的に成功した白人信徒や宣教師の子孫の影響力は政治の分野にも及び、王国政府の閣僚は彼らで占められるようになった。

今日、ハワイ人の中では、会衆派のハワイ人教会が独特の口調で「ミシヨナリー・チャーチ (宣教師の教会)」と呼ばれることがある。そこには「歴史も由緒もある立派な教会だが、“あの”ミシヨナリーが建てた教会」というネガティブな意味が込められていることが多い。「ミシヨナリー」という言葉がそのような用いられるのは、ハワイにおいて「宣教師が土地を奪い王朝を潰した」という一つの語り支配的であるからだ。しかし、この「モオレロ」では、アメリカ海外伝道評議会 (ABCFM) が当初より宣教師に政治に介入しないよう厳命していたことや、1893年にはすでに全ての宣教師が亡くなっていたということが語られていない。

1893年のハワイ王朝を転覆させたのは、ハワイの政治経済をリードする白人エリートから構成された「治安委員会」と呼ばれる組織であり、その主要メンバーは「ミシヨナリー・ボーイズ」と呼ばれる宣教師の子孫であった。王朝崩壊後、19世紀末のハワイは臨時政府からハワイ共和国へとその統治形態を変えていくが、臨時政府と共和国の大統領を務めたサンフォード・ドールは、Punahou Schoolの創設者でもある宣教師の息子であった。王権の弱体化を狙った1887年の銃剣憲法の起草者であるロリン・サーストンは宣教師の孫であり、臨時政府の閣僚でありハワイ共和国の司法長官も務めたウィリアム・スミスも宣教師の息子であった。ハワイ王朝の転覆は、「ミシヨナリー」ではなく、その“子孫”が中心となって企てたものであった。

HEAは王朝転覆に直接関わることはなかったが、当時の『フレンド』紙の記事に目をやれば、彼らが「異教の精神に染まり道徳的にも墮落した」王朝の転覆をいかに支持していたかが分かる。1993年1月17日の公式謝罪は、ハワイにおけるこのようなキリスト教の負の歴史を乗り越えるためのものであった。どれほど苦くともその謝罪の意味について振り返り、未来に向けての「和解」を模索し続けることが、今なお切に求められている。